ウクライナの原発の今と私たちの活動

河田昌東 (NPO法人チェルノブイリ救援・中部)

はじめに

2月24日に始まったロシアによるウクライナ侵攻は50日以上経っても終わる気配がなく、 今後の展開次第では生物化学兵器や、最悪の場合ロシアによる戦術核の使用までが危惧され ている。旧ソ連時代の1986年にウクライナ共和国で起こったチェルノブイリ原発事故被災地 をこの31年間支援してきた私達にとって、今のウクライナの惨状は他人ごとではない。 放射能による永年の被害に苦しんで来た人々が今度は戦禍に苦しむのを見る日々は辛い。

チェルノブイリ救援・中部の活動紹介

私達のNPO法人は1986年4月26日、旧ソ連のウクライナ共和国で起こったチェルノブイリ原発事故の被災地、ウクライナ国ジトーミル州の人々を過去31年間支援してきた。この州はウクライナで最も放射能汚染がひどく、事故処理作業者の数も35万人と多かった。活動開始当初から今まで様々な活動をしてきたが、最も多いのは病院や事故処理作業者の病気に対する医療支援である。チェルノブイリ原発から西に70Kmにあるジトーミル州ナロジチ地区は、



ウクライナで最も放射能被害の大きかった町で、居住禁止区域に指定された為、住民 2 万人は非汚染地域に強制移住させられたが、ソ連が崩壊しウクライナが独立すると経済が破綻し、残った 1 万人は国費による移住が出来なくなり、取り残された。この町の学校や幼稚園、病院などを私達は支援してきた。病気の大きな原因が放射能による内部被曝である事が分かり、野菜などの汚染が土壌汚染であることから、土壌の放射能をナタネの栽培で減らす「菜の花プロジェクト」を 2007 年から始めた。ナタネは汚染するが搾油すると菜種油は全く汚染しない事が分かり、食用やバイオジーゼル燃料として利用可能となった。

また、被災地の母親たちが「母乳が放射能で汚染して赤ちゃんにやれない」と泣く姿を知り、汚染していない粉ミルクを贈る運動も続けた。更に、被災地の子ども達の心の不安を少しでも和らげる活動として、毎年、手作りのクリスマス・カードを日本国内で募集し、ウクライナの子ども達に送る「クリスマス・カード・キャンペーン」は今も続けている。ナロジチ地区病院には、年間必要な医薬品の約半分を今も提供している。そんな中で今回の戦争が起こり、これまで付き合って来たウクライナの人々の状況を考えると他人ごとではない危機感がある。

チェルノブイリ原発とロシアの侵攻

2月24日に始まったロシア軍のウクライナ侵攻は、首都キエフの陥落を目指し、ベラルーシからも軍隊が入り、すぐにチェルノブイリ原発とその周辺の所謂「立ち入り禁止区域」を占拠した。首都キエフはそこから車で約3時間と近い距離にある。原発の管理をしていた職員211名は監禁され、交代が許されないまま強制的に労働させられた。そして3月9日、憂慮すべき事態が起こった。ロシア軍は送電線を切断し原発の電源を遮断したのである。このニュースに私は戦慄が走った。チェルノブイリ4号炉は36年前に爆発したが1~3号炉は2012年まで運転を続け、今も使用済み燃料の冷却中だった。もしポンプが停止し、冷却水が干上がり燃料棒が露出すれば再び爆発の危険がある。緊急冷却用ディーゼル発電機は2日間しか持たない。こうした危険性はロシア軍も知っていたとみられ、2日後にはベラルーシからの電線をつないで電源を回復させた。もし爆発が起こったら、と思うと今でもぞっとする。



チェルノブイリ原発の占拠はロシア軍にも大きな被害をもたらした可能性がある。放射能汚染が最もひどい原発周辺に長期間滞在し、周辺を戦車や装甲車で走り回った結果、放射能で汚染した表層土壌が粉塵として舞い上がり、兵士たちが吸込み内部被曝を起こした可能性が高い。更にロシア軍は原発周辺の「赤い森」と呼ばれる地域に塹壕を掘り、1か月間滞在した。4000名のロシア兵は、そこで汚染した松の木を燃やして暖を取り、食事を作り眠った。大

量に被曝した可能性がある。赤い森とは、チェルノブイリ原発の爆発で飛び出した強烈な放射能で、 周辺の森が死滅し赤く染まったのでこのように呼ばれている場所である。このような場所に入るべ きではなかったはずだが、ロシア軍の指揮官はこの事実を知らなかった可能性がある。一部の報道 ではこの兵士達約400名が現在ベラルーシの病院で治療を受けている、という。

ザポロジェ原発の攻撃

あった。

3月4日には更に恐ろしい事が起こっていた。 ウクライナ南部のザポロジェ原発でロシア軍の砲撃による火災が発生した。出力 100万 Kw の原子炉6基が現在も稼働中で、この原発はウクライナで最大なだけでなく、ヨーロッパでも最大規模である。もし爆発すればチェルノブイリ事故の 10倍、広島原爆の5千倍の放射性セシウムが飛び出した可能性がある。爆弾投下は職員の研修施設で、原子炉への直接的影響がなかったのは不幸中の幸いで



爆弾が仮に運転管理棟にでも命中したら、その影響は想像に難くない。ヨーロッパだけでなく地球 規模の放射能汚染が起こった可能性がある。 ロシア軍は同日、ザポロジェ原発を占拠しその管理下に置いた。ここを軍事拠点にし、戦車などの車両や移動式ミサイル発射装置を持ち込んだ。ここから、ドニエプル川対岸の町や首都キーウ近郊の町を砲撃している。ウクライナ軍は反撃のためにここを砲撃出来ない、という考えだ。しかし、6月以降、繰り返しザポロジェ原発に対する爆撃があり、ロシアとウクライナは互いに相手を非難している。8月6日には使用済み核燃料保管施設近くにロケット弾が投下され、高圧線が切断して原子炉一基が緊急停止した。

こうした状況は一歩間違えば原爆投下をはるかにしのぐ核の惨事が起こる恐れがある。国際原子力機関 IAEA 事務局長と国連のグテーレス事務総長は、原発からのロシア軍の撤退を求めザポロジェ原発地域を非軍事化すように警告したが、8月17日現在、状況は変わっていない。海外の一部報道によると、ロシア軍は南部クリミア半島を含む支配地域を通じて、電力をザポロジェ原発からロシア国内に供給し、ウクライナ国内の電力遮断の意図がある、と伝えられている。

原発は戦争になれば多大なリスクを伴う、という事は古くから指摘されていたが、それが現実となった。原発がある国が戦争になれば、通常兵器で核攻撃が可能である。原発の危険性は事故だけではない。

ウクライナへの緊急支援

ロシア軍が当初、攻撃の対象とした首都キエフの西 隣のジトーミル州も危険に晒された。永年活動を共 にして来た現地のカウンターパート「チェルノブイ リ・ホステージ基金」からは「毎日爆撃があり空襲 警報が鳴るたびに地下シェルターに逃げる」とメール が入った。この事務所のすぐ近くの「第25番学校」 が3月5日爆撃され崩壊した。ホステージ基金事務 所も爆風で全壊した。幸い、当時は外出禁止令が出て おり子ども達に被害がなかったようだが、民家も多数 爆撃で崩壊し死者も出た。この学校は私達がウクライ



ナに行く度に訪問し、子ども達の歓迎を受ける。昨年末に日本から送ったクリスマス・カードを受け取った子ども達の嬉しそうな写真が戦争直前の 2 月初めに送られてきたばかりだった。この子達は今どうしているだろうか。

3月になり、チェルノブイリ・ホステージ基金の代表、Y・ドンチェヴァさんから医薬品などの緊急支援の要請があった。しかし現在、日本からウクライナに物資の輸送は出来ない。偶然、ドイツの NPO「アクション・チェルノブイリ」と連絡が取れ、ドイツで医薬品などの調達が出来る事が分かった。ウクライナの緊急支援をしたいという仏教団体「真如苑」から寄付を頂き、3月14日に5百万円をドイツに外貨送金した。必要な医薬品などのリストをウクライナから送りドイツで調達。900Kgの医薬品等を積んだ車がウクライナとポーランドの国境の町プシェミシルに向けて3月25日にドイツを出発した。ウクライナからも消防士達が同時に出発し、この町で荷物を受け取り3月26日にはジトーミルに持ち帰った。これらの医薬品(140品目)をホステージ基金スタッフが必要な病院や事故処理作業者などに配布し、4月4日には全ての物資を配達した、との連絡が

入った。こうして日本からの第一便は無事ウクライナに届いた。8月現在、4便をウクライナに送り、ジトーミル州内の病院や消防士たちの活動に必要な物資を支援した。これまでの総額は約1140万円である。今後も皆様の寄付を募りウクライナ現地で必要な物資の支援を続ける予定である。

永年のチェルノブイリ支援活動が今回の戦争被害者の支援になろうとは思いもよらなかった。 1日も早く戦争が終わり、緊急支援から復興支援の日が来る事を願う。





図説明:

事故処理作業者協会

左:避難した子ども達の PTSD対策の医薬品

右:事故処理作業者へ薬



第 3 便を運んだジトーミル市の消防士達。



左:ナロジチ病院に届いた 医薬品。

右: 孤児院の子ども達に届 いた粉ミルク。